

言語教育における「英語落語」の有用性

竹田里香

(特定非営利活動法人 Creative Debate for GRASS ROOTS 理事)

落語は日本の江戸時代から伝わる伝統文化・芸能の一つである。表現活動でありながら、演劇やミュージカルと違い、その発表の仕方に数多くの制限がある。舞台背景、大道具、衣装、音楽、照明等の演出は決まった最低限もので、演者は高座といわれる少し高い台の上に置かれた座布団の上に着物を着て座り、扇子と手ぬぐいの 2 つのプロットのみを使用し、一人で登場人物全てを演じる。もう一つの特徴として、落語には必ず「落ち」(Punch Line) があります。観客は落ちで笑いたい、演者は落ちで笑わせたいという心理状況が寄席では生まれる。

この落語を英語で行い、こども達に最終的に寄席で発表させることを通じて、児童の英語教育における有用性を、言語習得論的側面と教育論的側面の両方から分析してみる。

- ①徹底した音読による意味理解の定着(Omi, 1988)
- ②登場人物や場面を自ら決定し気持ちを込めて表現することでそれらがエピソード記憶なりひいてはそれが長期記憶(Tulving, 1972)につながる
- ③すべてが理解したアウトプット(Swain, 1985)になっている
- ④自律性・有能性・関係性の 3 欲求を満たし(Deci & Ryan, 1985)、内発的動機づけ(Dornyei, 1985)や自己効力感(Bandure, 1997)を高める
- ⑤一人で何人も演じる対話型で発表スタイルも限られているので、ノンバーバルな部分が多く要求される
- ⑥落ちで観客に笑って欲しいという目的により、演者のイントネーション、リズムなどが自然である必要性が要求される
- ⑦落語を仕上げていく間で教師や仲間との間で ZPD(Vigotsky, 1978)が生まれる
- ⑧観客からの笑いや拍手が即座の評価となり、学習者がそれを楽しさ・喜びと感ずることで、自律的学習者へなっていく。

2009 年に発足した、こども英語落語協会では年に 3 回 (2 回は 30 人のこども演者が発表をすることも寄席、1 回はこども寄席の演者の中から選抜された演者による ばいりんがる寄席) の寄席を続けてきた。その映像の一部を会場の皆さまと一緒に見たいと思います。